

第2回発達支援検討部会 委員意見まとめ

◇討議テーマ: 気づき

支援のきっかけとなる「気づき」をテーマとして、「気づく場」「気づく人」の視点から現状や課題を把握し、今後必要な取り組みの方向性を討議

- | |
|---|
| ① 支援者(保育者など)の気づきの力・精度の向上が必要。 |
| ② 保育者が気づくための研修や保護者支援としての研修、支える立場の者が対応できるような環境づくりが必要。 |
| ③ 保護者の「不安」を「安心」に変えていけるようなシステムや事業が必要。 |
| ④ 家族への気づきを促せる関わり方・伝え方が課題。 |
| ⑤ 保護者に伝えることも大切だが、子どもを預かる学校や園でどうしていくのかの検討が必要。 |
| ⑥ 幼稚園・保育所等で異なる視点から見てくれる人(専門家等)や場が必要。 |
| ⑦ 幼稚園・保育所が家庭支援など困難な事例等を相談できる場が必要。(保護者が相談できる場はもとより、幼稚園や保育所にもそういう機関・場が必要) |
| ⑧ 保育所巡回相談等の専門的な相談員を増やしなが、より細かな対応が必要。 |
| ⑨ 相談する場面はあるが、中身の工夫が必要(頻度、開催方法等)。 |

《主な意見(要旨)》

- 保育所では0歳から既に気づきがある場合があり、睡眠や食事、人との関わりの部分から健診につながる。
- 健診の場で気づく場合もあるが、保育者は健診までに既に気づきがある場合があり、次に繋げていくことが重要。
- 3歳児健診における相談に繋げていくことが必要。
- 3歳から就学前の間は健診がない。年中児発達相談モデル事業は保育者の困り感に気づくことができた。
- 健診の未受診者は、家庭事情が関係していることもある。社会養護的にも居所不明の子どもの把握を含めて未受診者対策は重要。
- 予防接種の未接種者には、本人にとって不利益等になること等を具体的に説明することで気づくことができるのではないか。
- 保護者が育てにくさを感じていても、そのことを話すこと自体が不安。保護者を不安にすることなく保育者も子育てについて一緒に考えていきたい。
- 保護者が気づいているのであれば、それを早く安心に変えることが必要である
- 集団生活と家庭では子どもを見る視点は違う。気づきの視点の違いを伝えていかなければいけない。
- 保護者の気づきがないのではなく、保育や教育の現場にいる者が何を気づかせてあげればいいのかを判断し、伝えることが大切な役割である
- 研修等で現場レベルを高める、気づく力を養っていくことが必要である

○集団生活の中のことを家庭に持ち込むのは違う。集団の中で育てていくのが学校や園などであり、保護者に状況を伝えることは大切だが、それ以上に現場が気づく視点をもって子どもたちに接するのか、どう支援するのかを考えることが大事。

○毎日見ていたら分からないことも、月数回の子育てサークルでは子どもの変化がみれる。関わるスタッフが研修し、理解していかないといけない。

○保護者へどのように子どもの様子を伝えたら良いのかを悩んでいる。家庭での生活と集団での生活は随分と違う。集団での困り感は保護者には分かりにくい。

○保護者を不安にさせないように子どもの困り感を伝え、より良い支援に繋げていくことは難しい。保健師や臨床心理士に相談するなど、いろいろな角度から保護者への気づきに繋がるような支援をしてもらっている。

○園で気づいていても、保護者に気づいてもらえないこともある。子どもの支援だけでなく、家族支援が必要な場合は対応が難しい。うまく伝わらない家庭もある。

○家族支援が必要な場合は少しずつ、ゆったりとした気持ちで支えていくしかない。焦ることなく、じっくり相談できる場があるといい。

○幼稚園や保育所、相談機関で気づいて相談はするが、一過性であるように思える。継続的に見ていける相談体制があるとよい。やっていることを振り返りながら、より良いものに高めていくことができるのではないかな。

○保護者には相談後の見通しが求められている。相談をするが、その後どうしたらいいのか分からない。寄り添って一緒に歩めるような継続的なサポートづくりがあるといい。

○繋がってくれば継続的なサポートはできるが、繋がらないことは大きな課題

○保育所巡回相談で専門的に話をしてもらえることはとても良い。マンパワー不足が問題。

○様々な視点から見てもらえるところ(相談員など)があると、支援する者も整理できるし、支援に向けて動くこともできる。

○保育者は発達についての専門的知識が弱いため、専門的なことを補足する必要性を感じている。

○支援を検討する際に父親の存在は大きい。母親が家庭で孤立しないように、父親を含めた家族での支援が必要。母親以外の家族の気づきをどう考えていくのか。

○保護者の気づきがあり、連携していく必要があると理解したうえで、「子どもへの支援をどうするか」を考えていけば、現場(各小学校)でやるべきことがみえてくる。

○子ども又は保護者が困り感に気づくことができ、さらにその上で「○○ができるんじゃないか」とイメージできるようなセットの気づきをそれぞれの職員が持っている組織体であり、尚且つそのための研修会があるといい。

○保護者も子どもが困らずに安心して学校生活を送ることを望んでいる。

○保護者の理解が得られない場合でも、学校は学校でやるべきことを考えていかななくてはならない。学校は、その子どもに対して何ができるかを考えるためには気づきが大変だが、学校だと職員が子どもの暮らしにくさを見抜けるか。学習とは異なる視点から気づけるような力を養っていく必要がある。

○幼稚園は3歳からの入園が多く、3歳で初めて集団生活をし、その子どもにとっての困り感を幼稚園の職員が気づいて、保護者から家庭での様子を聞きながら園での生活の様子を伝えている。保護者にとって安心できる伝え方が一番大切だと思う。保護者へ返していく役割、正しく返していく役割が課題。